

委託事業実施内容報告書

平成21年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【ボランティアを対象とした実践的研修】

受託団体名 有限会社トヤマ・ヤポニカ

1 事業の趣旨・目的

- (1) 地域日本語支援ボランティア教室において、「相互学習につながる初期日本語指導ができる人材」、すなわち「交流型会話を通して学習者の生活日本語を充実させながら、最低限必要な日本語基礎構造などを獲得させ、さらに相互学びにつながる様々な工夫を初期日本語指導から行なうことができる人材」を養成する。
- (2) 地域日本語支援ボランティア教室において、「相互学習型活動を推進できる日本語コーディネータ」となる人材を養成し、従来の伝統的日本語教授を踏襲した地域日本語支援に行き詰まりを感じている現場の現状打開を試みる。

2 企画委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
8月27日 (木) 13時半～ 15時半	トヤマ・ヤポニカ	亀井・本多・ 家城 中河	1. 各教室の外国人・日本人状況報告 2. 教室の活動状況報告 3. 各教室の課題の整理と意見交換 4. 今回の講座への要望 5. 地域入門教室のありかたを整理する	各教室のボランティアリーダーが教室の課題を持ち寄り、それを踏まえて講座への要望を述べた。同時に、入門クラスの課題を共有し、そのクラスがどうあるべきかを議論した。
9月28日 (月) 18時半～ 20時半	環日本海 交流会館	加藤・副島 小松・柴垣 亀井・田上 本多・吉澤 五十里 中河	1. 運営委員会設置の目的 2. 運営委員の紹介 3. 講座開設の経緯 4. 講座の概要 5. 講座の内容 6. 質疑応答、意見交換	本事業の目的と概要の説明、加えて講座の経過報告を行った。それに対する、ボランティア、行政、学識者ら様々な視点からの意見を吸い上げ、その内容が今後の講座に反映されるよう検討した。

3月15日 (月) 10時～ 12時半	トヤマ・ヤ ポニカ	亀井・田上 本多・家城 中河	1. 各教室の課題検討 2. 入門クラスを中心とした運営 面の整備 3. 入門クラスのシラバス案提示 とその検討	講座内容を取り入れて来年度 の活動を計画したときに、 各教室に新たに発生した課題 を持ち寄り、検討した。 来年度の入門クラスの自立 に向けて、内容面と運営組 織面とを検討した。
----------------------------------	--------------	----------------------	--	--

【写真】(会議風景の写真を1～2枚参考に添付して下さい。)

+

<運営委員>

氏名(敬称略)	所属及び役職
加藤扶久美	富山大学留学生センター教授
副島健治	富山大学留学生センター教授
西 弘悦 代理出席：小松清美	財団法人とやま国際センター次長 財団法人とやま国際センター総務課係長
柴垣 禎	富山県知事政策室国際・日本海政策課国際協力係長
亀井あつ子	ワイワイ・にほんごたいこうやま代表
田上栄子	ワイワイ・にほんごたいこうやま運営委員
家城香織 [1回目と3回目] 代理出席：五十里昌人 [2回目]	日本語教室 in 黒部 副代表 日本語教室 in 黒部 運営委員
吉澤ジンタナ	日本語教室 in 黒部 運営委員
本多清治	日本語教室 in 氷見 運営委員
中河和子	トヤマ・ヤポニカ 代表理事

3 研修講座の内容について

(1) 研修講座名

「地域ボランティア・ブラッシュアップ講座

ー地域に密着した入門・初級支援 交流型活動を推進するにはー」

(2) 研修の目標

目標1:「相互学びにつながる初期日本語指導ができる人材」を育成する。

目標2:「相互学習型活動を推進できる日本語コーディネータ」となる人材を養成する。

目標3: 県内の日本語支援教室が、運営上の悩みを共有し、解決策を共に考えることで、より円滑な運営方法を学ぶ場を提供する。

- (3) 受講者の総数 16 人
- (4) 開催時間数(回数) 60 時間 (20 回)
- (5) 参加対象者の要件
富山県内の日本語ボランティア経験者
- (6) 受講者の募集方法
・地域のボランティア教室にチラシを持参し、説明を行うという形で募集した。
- (7) 研修会場
ア 講義 富山県教育文化会館(13回)
環日本海交流会館(1回)
イ 実習 各ボランティア教室(6回)
・射水市南太閤山公民館
・氷見市いきいき元気館
・黒部市国際文化センター コラーレ
- (8) 使用した教材・リソース
講師作成ハンドアウト
参考図書『にほんご宝船』アスク
『日本語おしゃべりのたね』スリーエーネットワーク
- (9) 講座内容

実施日	講座名／学習内容	講師	受講者数
9月5日	地域の日本語支援の新たな方向性【復習】／日本語の基本構造:文型の意味1	トヤマ・ヤポニカ 理事 松岡 裕見子	13人
9月13日	初級者以上と行っていた交流型活動を入門クラスに取り入れる／日本語の基本構造:文型の意味2	トヤマ・ヤポニカ 理事 松岡 裕見子	10人
9月19日	日本語の基本構造:動詞のフォーム／交流型会話へ① －名詞文、形容詞文、動詞文を意識して	トヤマ・ヤポニカ 理事 松岡 裕見子	15人
10月3日	交流型会話へ② －動詞のフォームを用いた文型を意識して1	トヤマ・ヤポニカ 代表理事 中河 和子	15人
10月11日	交流型会話へ③ －動詞のフォームを用いた文型を意識して2 －複文を意識して1	トヤマ・ヤポニカ 講師 高畠 智美	11人
10月17日	交流型会話へ④ －複文を意識して2	トヤマ・ヤポニカ 講師 高畠 智美	9人
11月7日	入門日本語クラスでの交流型会話	トヤマ・ヤポニカ 理事 松岡 裕見子	12人

11月15日	交流型会話のコツ① －言語形式を中心に	トヤマ・ヤポニカ 理事 松岡 裕見子	10人
11月22日	交流型会話のコツ② －自分の対話をふり返る －話題の展開 それを支えるもの	トヤマ・ヤポニカ 代表理事 中河 和子	8人
12月5日	地域の入門日本語クラスでの活動 －活動の一方法紹介	トヤマ・ヤポニカ 理事 松岡 裕見子	14人
12月12日	地域の入門日本語クラスでの活動 －実習に向けて①	トヤマ・ヤポニカ 理事 松岡 裕見子	13人
12月20日	地域の入門日本語クラスでの活動 －実習に向けて②	トヤマ・ヤポニカ 理事 松岡 裕見子	9人
1月9日	* 実習実施者への事前指導 2回 実習 太閤山で * 学習者への事後インタビュー	トヤマ・ヤポニカ 理事 松岡 裕見子	6人
1月16日	* 実習実施者への事前指導 2回 実習 氷見で * 学習者への事後インタビュー	トヤマ・ヤポニカ 理事 松岡 裕見子	5人
1月24日	* 実習実施者への事前指導 2回 実習 黒部で * 学習者への事後インタビュー	トヤマ・ヤポニカ 理事 松岡 裕見子	4人
2月13日	* 実習実施者への事前指導 2回 実習 太閤山で * 学習者への事後インタビュー	トヤマ・ヤポニカ 理事 松岡 裕見子	4人
2月20日	* 実習実施者への事前指導 2回 実習 氷見で * 学習者への事後インタビュー	トヤマ・ヤポニカ 理事 松岡 裕見子	5人
2月28日	* 実習実施者への事前指導 2回 実習 黒部で * 学習者への事後インタビュー	トヤマ・ヤポニカ 理事 松岡 裕見子	3人
3月6日	[前半]実習を振り返って① [後半]外国人を取り巻く日本社会の状況 再考①	トヤマ・ヤポニカ 理事 松岡 裕見子 代表理事 中河 和子	6人
3月13日	[前半]実習を振り返って②／来年度へ向けて [後半]外国人を取り巻く日本社会の状況 再考②	トヤマ・ヤポニカ 理事 松岡 裕見子 代表理事 中河 和子	12人

(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

実施日は平成22年3月13日(講座最終日)、回答者12名。以下に質問とアンケート結果の抜粋を記す。 ※質問、回答とも原文を要約、または一部省略している場合がある。

1. 講座で新たに分かったこと、自信が持てるようになったこと (選択式)

2. 地域の入門クラスで交流型会話の活動を行うとき、自分に足りないもの。(選択式)

選択肢	1. 自信がある(人)	2. 自分に足りない(人)
a 現在の地域日本語支援教室の状況やそこで活動するボランティアに求められているもの	11	0
b 外国人の日本語力にかかわらず地域の隣人として接する態度や気持ち	11	1
c 日本語の初級前半までの文法知識	5	5
d 自分たちが日常的に行っている会話を分析するときの視点	10	3
e 日本語力が高くない外国人と会話を続けること	5	2
f 入門クラスでの対話を中心とした活動の進行案を立てること	11	6
g 上の活動に用いる配布資料を作成すること	6	5
h 上の活動を実際に行うこと	5	6
i 県内の他のボランティア教室の状況が分かった	9	0

以上のように、日常の会話を分析する視点が育ち、交流型会話を行う際のハート(多文化共生意識)と、活動の進行案を立てるところまでは、自信が持てるようになったことがわかる。その一方、文法知識には不安が残り、進行案はある程度立てられるようになったものの、実際の活動にはまだ自信がないという結果が出た。しかし、今回の総時間数を考えると、一定のレベルの進行案が立てられ、それをある程度活動に反映できるという自信を受講生が持てたことは、評価に値すると考える。

3. この講座で得たものを、教室の活動(入門クラスに限らない)にどのように活かしたいか。

- ・(入門クラスでない教室の)活動の進行をある程度予測し、計画的にするのに役立てたい。
- ・自分の教室の他のボランティアにも学んだ知識を伝え、共有できればいい。
- ・相手の話をしっかり聞く態度を意識してとるようにしたい。
- ・上から教えるという見方ではなく、一緒に教えあう(理解し合う)という風にしたい。
- ・外国人の日本語力をアップさせるために、教え合うことより、聴く姿勢、待つ姿勢、話し出そうとするときに補う形のサポート力が大切。それを活動に活かしたい。

これらのコメントから、交流型会話にまず必要なハート(多文化共生意識)の醸成がより進んだことがわかる。文法に関するコメントがもっと出るのではないかと考えていたが、文法という「武器」を持ったことに流されず、相手への接し方を第一に考える姿勢が見られたことは、本講座の趣旨に合っており、実施主体としては予想以上の反応である。

4 来期、アドバイザー派遣制度利用の希望はあるか。

5 講座を受けてボランティアの役割や活動内容に関する考えなどに、変化があったか。

6 その他、講座に関する感想。

4、5、6の結果については、以下の関連事項の中で随時述べる。

② 実施主体からの研修内容結果評価

目標に照らし合わせて評価する。

目標 1:『相互学びにつながる初期日本語指導ができる人材』を育成する。』について

受講者全員が相互学習型の活動に慣れていたため、短い時間ながら半数以上が、「交流型会話を楽しみ、話を継続する」という最低限の目標を達成することができた。実習後に学習者にインタビューを行ったところ、全員から好評価を得たことも、その証と考える。しかしまだ初期日本語指導担当者としての独り立ちは難しく、今後も引き続き受講者へのバックアップが必要である。

目標 2:『相互学習型活動を推進できる日本語コーディネータ』となる人材を養成する。』について

目標 1 を大きく掲げてはいたが、実際の講座では、初期日本語指導時に限らない活動の進め方のノウハウや、広く交流型活動に必要な多文化共生意識の醸成を促す内容も、繰り返し提出した。今回、目標達成にまでは及ばなかったが、上記アンケート 3 の結果や実習時の様子から、受講者のうち数名はもう一段上の研修を受けることで、日本語コーディネータになれるまでの力をつけたと感じた。

目標 3:『県内の日本語支援教室が接触、交流する場の提供』について

新設教室のリーダーが、設立から数年を経た教室のリーダーと接するうちに自身の役割に目覚め、積極的に教室の運営に関わるようになっていった。また、「アンケート 6. その他、講座に関する感想」には、「県内の各教室の交流があれば相談、連絡し合い成長できると感じた。」「他の教室の人のがんばっている姿を見習い努力していきたいと思う。」等の記述があった。これらのことから、接触、交流のいい場が提供できたと考える。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

富山県国際・日本海政策課では、平成 20 年度より引き続き、新規外国人登録者を対象とした初期指導教室を実施する。これは地域に入った新規外国人に、4～6 ヶ月ごとに日本語指導の機会を提供する、入門日本語指導公的サービスである。私たちは、これに企画段階から参加し、日本語指導にあたる。この教室では、①必要最低限の日本語の基本構造の理解、②日本語学習を継続させる意欲の向上、③生活情報の提供による定住化の促進、等をねらいとしている。昨年度までは 6 時間、今年度は 12 時間のわずかな時間ではあるが、いずれは公的言語保障へと拡大していく可能性を持つ事業である。

また、本年度新たに開催されるとやま国際センター主催「外国人就活応援講座-職場から広がる多文化共生-」に企画段階から参加し、講師陣の中心的役割を務めつつシラバスを作成する。

その他、地域日本語支援ボランティアの養成や再研修、また以下の(11)①に記すアドバイザー派遣制度に関しても、主催のとやま国際センターと連携する形で企画し、地域日本語教育にあたる。ここでは、地域日本語教育ではまだまだ未開発の識字教育のシラバスやシステム作りにも着手する。また、地域日本語教室に寄せられるさまざまな要望・問題、例えば外国人から求められるキャリアアップの要望に、地域教室がどのように対応するのか(しないという選択も含めて)などを、ボランティアメンバーや行政関係者と共に考え、地域日本語教育を取り巻く問題を整理していくことも、自分たちの役目だと思っている。

今回の受講した県下の地域ボランティア教室の中心的メンバーと、今後も密に連絡を取る体制ができています。彼らの状況や要望を見て、さらなるボランティア・ブラッシュアップ講座を行うことになるかもしれない。

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

とやま国際センターは、平成 21 年度より地域日本語支援ボランティア教室へのアドバイザー派遣制度を実施しており、この事業は平成 22 年度も継続される。本研修では最低限の目標は達成できたものの、今後も引き続き受講者へのバックアップが必要である。さらに今回ほとんど扱えなかった、シラバスを立て、適宜それを柔軟に変更する等、年間を通してクラスを運営する力の養成も急がれる。そこで、平成 22 年度はこの派遣制度を用い、本研修で身に付けたことをよりブラッシュアップさせ、さらに各々の教室に合った形にしていくためのアドバイジングを行いたい。

なお、アンケート4で「アドバイザー派遣制度を利用したフォローアップの希望」があるかどうかを尋ねたところ、12名中11名が強く希望していた。

② 研修後の人材活用

本研修の受講者の約半数は、今後各教室で初期日本語指導を担っていくこととなる。人材不足に悩まされてきた教室では、人材の層が厚くなり、今までできなかった初期指導教室の組織的運営が可能になると期待される。また、地域日本語教育のできる日本語教師を雇って、初期指導を任せていたある自治体の教室では、予算削減のため平成 22 年 4 月以降の担当者の手当てがつかないという事態が起きていたが、本研修の受講者の担当が決まった。専門性のある日本語教師への予算削減自体は残念なことであるが、その教室が入門クラスの廃止を免れたのは救いである。

本研修を通じて各教室の中心的人材に獲得されたスキル・知識は、教室内の他のメンバーにも共有され、教室全体が底上げされることになるだろう。このことは負担の平等化につながり、それぞれのメンバーにとって活動への自信ともなる。結果的にそれは、教室の活性化、そして継続につながると考えられる。

また、少数ではあろうが、今回の受講者の中から日本語コーディネーターも担える地域の日本語支援の「専門家」が生まれてくると期待している。今後も自覚的な努力が必要であり、時間はかか

るだろうが、その萌芽を感じた。

(12) 今後の課題

「交流型会話を楽しむ」とこと、「日本語の構造の意識化(さらには定着)」の両立の難しさ、危うさを感じている。今回の実習では「交流型会話を楽しみ、話を継続する」ことを第一のねらいにしたため、実習実施者も学習者もほぼ対等の立場で活動を楽しんでいた。しかし「構造の意識化」にもう少し比重を置いた場合、ボランティアが一方向的に教える場に立ってしまわないか、との危惧がある。両者のバランスをとりつつ、どの程度「構造の意識化」を取り入れていくかということが、この活動自体の課題である。

また、「アンケート 5. 講座を受けてボランティアの役割や活動内容に関する考えなどに、変化があったか。」に対して、「進行案、教材の作成はとても負担だった。」「進行案を準備するのは大変。地域型の教科書的なものが必要。」との声が複数あった。同時に「入門クラスの対応は自分達の役目ではないと思っていたが、関わっていかなければと思っている。」という覚悟も見られた。

真摯に初期日本語指導を行おうとすると、結果的にボランティアに大きな負担を強い、同時に大きな責任を負わせることになる。今回の研修は一定の成果を収めたと考えるが、果たして彼らに継続的にこの負担と責任を負わせていいものか、という迷いは今もある。先に述べた「交流型会話を楽しむ」とこと「日本語の構造の意識化」の両立も、地域日本語教育のできる日本語教師が後者を担えば、ボランティアは前者に集中して活動できるはずである。多文化共生社会推進のためにも、ゆくゆくは初期日本語指導が、地域日本語教育のできる日本語教師により公的保障されるよう、環境の整備が望まれる。